

煙 綠

早己抄原

子孫永記



権 謀

昭和四十七年三月一日 第一刷

定価 六〇〇円

著 者 早 乙 女 貢

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 大日本印刷

製本所 大 口 製 本

・万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

權謀／目次

青年	五	香の匂い	一九六
妖気	一一	公方討ち	二一〇
甘い肌	二四	余燼	二三五
海鳴り	三九	恋ぐるま	二四九
三好三人衆	四七	旅路	二六三
堺の女	六八	いけにえ	二八二
唐人蔵	八四	女の城	二九五
影走り	一〇二	死神が笑う	三二六
謀殺の環	一二六	奔馬	三二九
炎	一三四	血の絆	三四七
花の御所	一四六	戦国有情	三六一
野盜	一六三	劫火果てなく	三七八
秘薬	一八一	夕映え	三九五

装
幀
三
井
永
一

權

謀

青 年

長崎を訪れたことのある人は、誰しも感じるであろうが、地形的に見て、実に天然の良港をなしている。

三百メートル前後の山稜の間に深く切りこまれたようにえぐられた長崎湾は、こうした地形の特徴として水深も不足なく、東支那海の風濤から船と港を完全に守ってくれる。

湾外の伊王島など大小十数の島々が波浪をやわらげ、屏風のように屹立した稻佐山の丘陵が西風をさえぎっているのだ。湾口が南を向いているのも好条件である。

この良港を発見したのはポルトガルの宣教師という。

元亀元年春、大村氏に乞うて交易と布教活動の根拠地としたのが今日の長崎発展の由来という。

が、それまで無人の浜だったのではない。

応永ごろ地頭となった長崎小太郎の末裔甚左衛門頼景が大村氏の被官として長崎城を築き、権勢を誇っていたのである。

元亀の前年、永祿といえ、中央的には川中島の戦いなどのあった天文・弘治の後で、足利將軍は義輝・義秋（の

ち義昭と改名）が争い、新興勢力として織田信長が擡頭してきた、もつとも戦国らしい激動の時代。

その永祿八年の春——三月のはじめの朝まだき。

長崎湾口、神崎ノ鼻を一衣帯水にのぞむ葦尾郷の浜に流れついたものがある。

丸太を五、六本並べただけの筏^{べいばた}である。

その上に一人の若者が縛りつけられていた。

「お爺イ、死人だよウ」

発見したのは、漁師の娘だった。

十四歳のおつる。漁師の娘には惜しいきりようで、長崎の侍たちの中には、だいぶ目をつけている者もいる、という噂だが、本人はまだ、童女の感情らしい。

今朝も、貝を拾いに浜へ出た。

昨夜、ちょっとした嵐があった。大風で荒れた翌朝は、珍しい貝が浜へあがることのあるのだ。

「なんじゃい、大仰な声ば出しよって、南蛮貝でも拾いよったとな」

「死人よ、死人が流れついたと」

「溺れたとじゃろ、昨夜はあげな嵐じゃったけんのう」

「ううん……」

そうじゃない、と力説しようとするのだが、驚きと昂奮でうまく言えないのだ。

おつるは夢中で老人を引っ張って小屋から出た。

東に山を背負っているので浜辺を朝日が染めるのは遅い。

空は水色に澄み、雲が美しく色づいて、昨夜の嵐も嘘のように、水面は凪いでいる。

この美しい朝に、残酷な情景だった。筏に縛りつけられた若者はげい波に洗われて、肌着は千切れ、下帯だけの遅い五体もぐったりとして生気がない。

浜育ちだけに、おつるは馴れていた。左胸に耳をつけて鼓動を聞くと、ぱっと目を輝かした。

「お爺イ、生きてるよッ」

その声に呼びさまされたように若者は、かすかに呻いた。からだは冷えていた。冷えきっていた。

普通の体力気力だったら、とつくに死んでいたろう。

このむごい私刑にあう前か、流されているうちに何かにぶつかったのか、半裸の肌に無数の傷があった。

生々しい傷口は、血まで洗い流して、無気味に口をあけていた。この若者の異常なほどの気力が激浪と冷水に耐えぬいたにちがいない。

「お爺イ、早くー」

おつるは気丈だった。

ナタを持ってきて、固く、ひき縮った麻縄を切りほどくと、老人と二人で小屋の中へ運んだ。

「火ばどどん燃やすとよか。わしや村の衆が気のつかんうちに筏は始末してくるけん」

「筏なんかどうでもよかとよ」

「うんにゃ、始末したほうがよか」

老人は、孫娘に一々説明しているひまもないように、ナタを持って小屋を出ていった。

（どげな事情か知らんばってんがムゴかことばする）

まだ幼な顔を残した若者なのに。

こんな残酷な私刑をした以上、助かったと知ったら、またどんな手をのばしてくるかしかない。

乱世を生きてきた六十年の智慧だった。

筏はバラバラにしてしまえば、ただの流木になる。

老人が戻ってきたときは、若者はいろりのそばで水を飲んでた。

「おう、気がついたとあるな。どぎゃん風じゃ工合は」

「おかげで生きかえった」

笑おうとしたが、痛みが走ったらしく、うっと語尾をのんで眉をひそめた。

「あ、まだ無理をしたらいかんばい。寝とくほうがよか」
若者は素直にこの言葉にしたがった。

年齢は十六、七だろう。筋骨逞しく、苦痛に時々、顔をゆがめるが凛々しい顔だちだ。

眉が濃く、唇が赤い。少しばかりのあいだに、肌の色艶も死人の色からよみがえっていた。

粗朶火の赤い色のせいではない。しおれていた草木が、慈雨を得て生き生きとよみがえるように、生気がみなぎって、見る見る充実してくるのだ。

「どぎゃん事情があるか知らんばってん、安心して養生す

るがよかたい。ひどか目に逢うたもんな」

「私は……悪いことはしていない」

「よかよか、何も話さんでよか。名も素姓も知らんほうが気楽たい」

そう言われると、かえって隠しておけない。命の恩人のだ。

「——城之介」

と、名乗った。

「やれやれ、御丁寧なことたい。わしゃ弥助じゃ」

「あたしは、おつる」

ペコリと、頭を下げて、

「ねえ、お爺イ、氣つけ薬にお酒がよかとやないね」

「そうじゃな、与八ンとこさ行つて一升借りて来るがよか」
大きな瓢箪を抱くようにして、出ていったと思うと、間

なしに駆けもどってきた。

「お爺イ、お侍がいっぱい来るよ」

武士が大勢やってくる。

おつるが顔色を変えたのは、その物々しい様子を見たからだだった。

兜こそかぶつてはいなかったが小具足に槍薙刀を持った、十数人の一団だった。

浜辺で何やら声高に話しながら歩きまわっている様子が尋常ではなかった。

（探しているー）

筏を探しているのだ。

城之介にとつては、

（敵！）

と、感じた。

「探しにきたとよ、城之介さまを探しとるのよ」

「叱ッ、声がふとか」

弥助老人は制止して、戸口からのぞいたが、

「来よつた、間違ひなか」

と、おつるの言葉を裏書した。

道具というほどのものはない、貧しい小屋のうちに、破れつづらがある。弥助老人はそこから、ぼろ布に包まれた細長いものをとり出した。

布をひらくと、一振の刀が出て来た。拵こしらへのしつかりした由緒ありげな大脇差である。

刃渡り二尺ほどもあるうか。かなり反りがふかい。

「さ、これば持つて、藁の中へ隠れんされ」

考えているひまはない。城之介は、言われた通りに、土

間の藁の中へもぐりこんだ。

漁師小屋だが、縄をなったり席ひしを編んだり、何かと藁は日常に役に立つ。綿がないと藁蒲団も珍しくない。

「息苦しかばつてん、がまんして」

おつるが、頭の上に蓆をかけ、蓑をかぶせた。

横柄な喚き声が、戸口に迫っていた。ほとんど間一髪だった。

「おやじ、居るか」

ひげ面がのぞいた。

槍も薙刀も抜き身である。いうまでもなく、かれらは長崎甚左衛門頼景の家臣たちだった。

この蜷尾郷のあたりは、長崎氏の所領でも南のはずれで、宿縁の深堀家との境に近いから、争いが常に絶えない。

「おやじ、浜で変わった物ば見んじやったか」

「へえ、変わった物て何かいな」

「筏だ。人間が一匹、縛られとったはずじゃ」

「知りまっせんが」

「隠すと、為にならんぜ」

「隠すも何も、知らんもんは知らんですたい」

弥助老人は、藁の上に坐って、縄をないはじめている。

「熱い」と、ひげ面がしかめて、

「やけに火ば燃しとるな、火事になるぜ。もう寒かなかるうが」

「年寄りに冷えこみはこたえますけん」

「娘も冷えとるか」

ひげ面はおつるをみた。

「娘の尻は、どげん暑かときでも冷えとるがのう」

赤い口が舌なめずりした。

おつるは恐怖と不安で、わなわなしていたのだ。その様

子も、捜索者たちの眼に不審にうつったのかもしれない。

娘のおびえている姿は、男には刺激的なものだ。荒々し

い血をかきたてずにはいない。

胸や腰のあたりに、女らしいふくらみが、粗末な小袖の上からもはつきりわかる。

気持の上では清純な少女でも、成育したからだが放つ色香は蔽うべくもない。本人が意識していないだけに、みずみずしく、処女肌が匂うようだ。

ひげ面の武士は、この娘の評判を思いだした。

「おつるといふ名だったの」

「……」

びくっと、娘の肩がふるえた。

青い顔だった。唇が動いたが声が出ない。

「はははは、何もそぎゃん恐がることはなか、とって食おうと言わんたい」

「……」

「そん代り、抱いちゃってもよか」

ぬっと、入ってきた。

「これ、何ばなさるとな」

弥助老人があわてて、ナタをつかむのを、じろりと見て、

「爺はすっこんどれ。くたばりぞこないに用はなか」

「うんにゃ、お侍でも、孫娘に手ばかけたら、許さん」

「言うわ、言うわ」

ひげ面は巨軀をゆすって哄笑した。

それから戸外の部下たちに、ほかの家を探すように、命令した。

弥助老人のけんまくに怖れをなしたのではなかった。部下たちを追いはらったのは、いやしい目的があったからだ。「邪魔者が去んだわ」

と、戸をたてて、ふりかえった顔は、いろいろの炎をうけて、ぎらぎら脂光りしている。

「さて、ゆるりと聞こうたい。本当に筏に縛られとった奴を知らんとか」

「知らん」

「爺に聞いちやらん。おつる、答えろ」

「は、はい……」

「昨夜、四郎ガ島のあたりで流れとったのを、漁師で見たやつがいる。潮の流れと風向きからいっても、この辺に、流れついたはずたい。筏を引き上げたらしかあともあるけんな」

「……」

「若僧ばってんが、五島海賊じゃ、なかま割れして筏流しされよった。生きとりや捕えて責め問いする。どうせ打首じゃが、死体でも曝首にする」

そう言いながら、おつるの表情をうかがっているのだ。

おつるも弥助老人も平静をよそおいながらも、城之介の潜んでいる藁の山が気にかかってならない。

さぞ息苦しいだろうと思う氣持が、ちらちらと視線を走らせる。

(面妖だど……)

ひげ面は氣がついた。

不審の眼で見れば、異常な状態はそれとわかる。

かれは土足のまま床へあがると、いろいろから火のついた粗朶を抜きとってにやりとした。

「あつ、何ばしなさつと」

弥助老人が武者ぶりつくのをどうと蹴倒すや、ぼつと藁の山へ投げた――。

乾いた藁だ。ぱつと燃えあがった。

たまぎるような悲鳴をあげて、おつるが走り寄る。弥助老人もあわてて駆けよる。

その藁の中からはね起きた城之介の姿に、ひげ面は哄笑した。

「出て来よつたな、小僧。そぎやんとところに隠れちよつて、助かるばし思うてか」

この髭の武将の失敗は、おのれの腕を信じすぎたことであらう。

小さな筏に縛りつけられて、半死半生になっていた若者――というだけで、舐めてかかっていたのだ。

「観念しよれ、どっちみちその首は烏がかっぼじるとたい。来いッ」

「わかった」と城之介はいった。

「見つけた以上、しかたがない。だが、火を消さんと家が燃える」

「ははは、こぎやん、ぼろ小屋が燃えよが倒れよが、知っ

たこつちやなかない。来い！」

城之介は唇を噛んだ。

その間にも、藁はどんどん燃えているのだ。おつるも弥助老人もありあう水桶をぶちまけたが、それぐらいでは消えそうにない。

「首にしても、連れてゆきたい」

ぎらりと鬚は抜刀した。

これまでだった。ぱっと城之介は燃え藁を蹴上げるや、抜き打ちにすくい斬りの一刀を走らしている。

膝から腿を斬られて、のけぞりながら、腕いっぱい叩きつけてきたのをかわしざまに、踏みこんで二撃を袈裟がけに――適確にきまつた。

しゃーっと血が霧のようにしぶいた。断末魔の咆哮をあげてぶつ倒れたのをふりかえりもせず城之介は、藁の火を消しにかかった。

「待ちんされ」

弥助老人はあきらめられたように、かぶりをふって、

「こぎゃんことになつたら、もうどうしようもなか。この小屋は燃やすしかなかですたい」

「なぜだ」

「この死骸な隠せまつせん。お前さま、こいつの鎧ばいいで着なされ、そして火事さわぎにまぎれて逃げるがよか」
愚図愚図していれば、煙を不審に感じて連中がもどつてこよう。

城之介は素早く、死体から具足をひきはいだ。血を拭いているひまはない。そのまま着込むと、濡れ蓆を頭にかぶった。

「それでよか。おつるばひっさらって走るがよかたい。その方が、奴らの目ばくらませる」

「お爺イも逃げんと……」

「わしのことはよか、早よ、裏山へ入って南さ行けば御領外に出る。野母崎で落ち合うけんな」

弥助が残火をあふつた。いろりの中にもそこらのものを投げこんだから、ぼうつと燃え上り、炎が天井までどどき、柱や棟がめらめらと音をたてて燃えはじめた。

その煙と火に、漸く気がついたらしく、火事だ、と叫び合うのが聞こえた。

「ゆくぞ」

城之介はおつるを横抱きにするや濡れ蓆に顔を隠して飛びだした。

妖 氣

その少し前、長崎甚左衛門頼景（初名頼純）は顔も洗わずに酒杯をかたむけ、

「まだ捕らんのか」

真っ赤になって吼えていた。

「おれが領内に流れついたのが、本当なら、とり逃したら笑いのじゃ、草の根をわけても捜しだせ」

「手配りしてございます。御安心のほどを」

重臣の戸町惣兵衛重方がこたえた。

「ねずみ一匹、逃しはしませぬ」

自信にみちた言葉である。

事実、この長崎氏の勢力は、このあたりでは大村純忠について強大であった。甚左衛門は純忠の被官大名である。

長崎城は長崎港の奥、金比羅山の南がわの丘にあった。

天然の要害で、鶴ノ城、あるいは龍ノ城との別称もあったというから、かなりの規模を持っていたさまが想像できる。

その望楼からは、入江が一望に見わたせる。入江に入ってくる船影も手にとるようにわかる。

入江の口はむろん要所に烽火台がそなえられ不審の船を見れば、のろして知らせようになっていた。

少し後に、宣教師ワリニヤニが長崎のことをイエズス会に報告した文によると、

へこの場所（長崎）は天然的な城塞である。いかなる日本の領主も武力をもってこれを占領し得ないであらう」と、書いている。

また、三百年ほど後に、吉田松陰が、長崎に遊んだ日記の中に、

へ城山ニ登リ長崎ヲ望ミ、小魯恩ヲナス、山ノ形勢、峯火山其後ニ興リ毘比羅山其右ニ連リ、彦山其左ニ峙シ、宜カナ、長崎甚左衛門ナルモノ地利ヲ恃ミ……」

云々とある。

山城である。城は戦さのときにたてこもるためで、日ごろは山すその屋形に住んでいる。

むろん、屋形といっても、周辺は濠を掘り土塀をめぐらし、所々に矢はざ間を切り、望楼もそなえていた。

甚左衛門は身のたけ六尺を超える巨軀である。顔も大きく、もみあげが黒い炎のようだ。

ギヤマンの酒杯に透ける真紅の酒を、もう五、六杯も飲み干していた。

赤酒、とも珍陀酒ヂンダウとも称う。ブドー酒である。近ごろ平戸をさけて、横瀬ノ浦ヨコセノウラに入ってくるようになった南蛮船から手に入れたものであった。

「美味い！」

舌をならした。

「戸町、われも飲め」

「忝^{かたじけなく}なき仰せながら」

「いやか」

「血でございますな、まるで。血を飲むような気がしまし
て」

「甘いぞ。南蛮人の血かもしれないさ、はははは」

豪放に笑った瞬間、ぽとり、と酒杯が落ち、けたたまし
い音をたてて割れた。

（どうした？）

ぎょっとした。

瞠目して割れたギヤマンの酒杯を眺めている。

甚左衛門はまだ壮年だ。酒好きだが、手のふるえる歳で
はない。

それに、日本の盃やぐい呑みとちがって、ギヤマンの酒
杯は細足に底がひらたい。手からすべるはずがなかった。

が、すべった。

すべり落ちただけではない。

異様に感じたのは、粉々に砕けたことであつた。

「殿……」

と、戸町惣兵衛が眉をひそめて、

「如何なされました」

「うむ」

「ギヤマンの破片は足に刺さります。これ、女ども、と
り片づけい」

「いや、待て」

甚左衛門はなおも、夢から醒めぬような表情で、小姓が
差し出す三方から新しい酒杯をとりあげた。

珍陀^{チンダ}酒を注がせると、ぐいと、一息にあげた。それから
だった。わざと、手からすべらせたのだ。

さっきとほとんど同じ——無骨な手から、すべり落ちた
酒杯は、しかし、割れることもなく転ったのである。

第三者の眼からは、さっきと少しのちがいない。

「面妖でございますな」

戸町惣兵衛も首をひねった。

「あまりの違い……」

最初のは、みじんに砕けている。

次のは、全然、割れずに転った。

ギヤマンの材質も大きさも同じものののだ。

真っ赤だった甚左衛門の顔が歪み、眼はまだ焦点が定ま
らなかった。戸町などの感じた不審以上の、濃い疑惑に包
まれていた。

（おれは落とさなかった。いや、かりに手が呆^{ぼろ}けて、落と
したとしてもだ、割れはせぬ）

それをたしかめてみるために、二度目に落としてみたの
だ。

（誰かが、引つ張った……）

そう感じた。酒杯は、勢いよく落ちた。

叩きつけたのだ。叩きつけなければ、みじんには砕けぬ。

「誰が？」

思わず見まわした。

戸町をはじめ、君側の者たちは啞然としている。

甚左衛門の不審はかれらには通じようもない。あり得ないことなのだ。

座には六、七人いた。その目の前で、誰が、主君の手から酒杯をひったくる者があろう。

あり得ないこと。

(いや、たしかだ、誰かが……)

ぎろりと、濁った眼であたりを見まわしたとき、天井ですさまじい音がした。

ねずみが十匹ばかりで走り回る音だった。

「なんじゃ、狂いねずみめら」

ふり仰ぐ——その視野の中に、ふっと、影が入った。

回廊の縁先である。影が一つ、音もなく入ってきて、坐った。

部屋の中に妖氣が流れた——。

音もなく、その影は忍びこんだのである。

天井を見上げた一瞬であった。

影に気がついたとき、天井のねずみの狂躁は、嘘のよう

にやんでいった。

端近にいた若侍が、ひき吊るような声をだして、刀をつ

かんだ。

「……」

にやりと、笑ったようである。

妖氣がはれ、その奇怪な男の風貌をあらわした。

「——わしじゃ」

ゆらりと、簀ノ子に腰をおろしている。

異様、というしかない。年齢性別民族の見当もつかない。

赤茶けた蓬髪を、うしろで薬で束ねている。ひょろりと

背が高い。眉毛があるかなしかにうすいのも無気味だが、

奥眼がざらりと大きいのに、眸はどこを見ているのか、虚

ろに灰色だ。

頬骨が飛びだしそうに削げた頬——瘦軀鶴の如く、とい

う形容があるが、枯木に着物を着せたようだ。

広袖の柿色の衣である。

唐人のようでもあり、赤茶けた毛髪や灰色の眼、その長

身などは南蛮人の血が入っているようでもある。

「わしじゃ、どうなされたのか」

ほとんど齒の抜けた黒い口をあけて、みんなの緊張をあ

ざけるように見まわしている。

「うぬか、果心か」

甚左衛門は、腰をおとした。

この奇怪な人物なら、さきごろから長崎の城下に住んで

どこから来たのか、どこへ行くのか、誰も知らぬ。果心と名乗った。

一切の素姓が不明だが、奇妙な術をつかう。だから、興味と、それ以上に怖れの眼で見られているが、本人はひょうひょうとして好きなときふらりと屋形へあらわれる。

果心居士と呼ばれているが、この男が、何か食べるところを見た者はいない。

霞を喰っているわけではない。

酒が好きらしい。いつも、瓢箪を腰にぶら下げ、曲った杖を手にしている。

「何しに來おった」

甚左衛門は苦々しげに言い、酒杯をとったが、

（こいつか！）

と、気がついた。

「こりゃ、果心、また、いたずらしおったな」

「ほ。なんのことかの」

「とぼけるな」

「聞いておる」

「ギヤマンの盃を、ぶち碎いたのはうぬであらう」

「知らぬよ。おぬしが、とり落としたのであらう。それ、それ、手がふるえておる」

そう言われると、手がふるえ、指先から知覚がなくなるような気がした。あわてて、甚左衛門は酒杯を置いた。

（目くらましじゃ！）

手に持ったギヤマンの酒杯を、妖しいワザですくい落とされ、叩き割られたのだ。

（奇ッ怪なやつ！）

えたいの知れない果心居士の無気味さは、領主の権力でも手に負えない。

「いたずらはよせ、ギヤマンは急には手に入らぬ」

甚左衛門はそう言い、そのおれの言葉が媚びるような調子になったことに、腹が立った。

（こんな幻術師に、嘲弄されて、がまんせねばならんのか、わしともあろうものが！）

風か、影のような相手であった。權威も武力も、この男の前には、まるで意味をなさぬ。

「ギヤマンで一杯、チンタ酒を頂戴したいな」

ぬけぬけと、果心居士は言った。

「のどがかわいてな」

「水でも飲んだらどうだ、水なら入江にうんとある」

「チンタ酒がよろしいわな」

これを聞かえないように、甚左衛門は大きな、あくびをした。

「眠い……」

無視した。

帰れよがしである。が、果心居士は、けろりとしている。小鬢のあたりの毛を一本抜いた。

ふうッと吹き飛ばす。